

草津市立矢倉小学校通信 令和元年 5 月 15 日 NO.3



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 物語をもつことで

庭のすみに根づいたモクレンが、今年初めて白い花を咲かせた。苗を植えてから7年になる。私の背丈より少し高いくらいの若木である。日頃は、庭の草取りをしているときに、「そういえばここにあったなあ。」と確認し、「いつになったら白い花を見せてくれるのやら。」と思いを寄せる、そんなモクレンだった。それがこの春、花を咲かせたのである。淡く透き通る白い花を見たとき、モクレンにまつわる子どもの頃をなつかしく思い起こした。

子どもの頃、庭先のあちこちに雪が残っている早春、どんよりと暗い色しかない山のあちらこちらに、白い花をたくさんつけているのを縁側から眺めていたこと、そんな樹木の名前が知りたくなって大人たちに尋ねてまわったこと、しまいにはその正体を近くで見たくなって山に分け入り、やっとの思いで辿り着いたことなどである。私の故郷は山陰地方。その時期、薄茶色のどんよりとした山並みに現れる花の白さに不思議な魅力を感じたからだった。

多くの人には、おそらく何の変哲もない「モクレンの花」だろう。そこには物語はきっとないはずだ。じっと見つめれば、それなりに細かな事実は明らかになるとしても、あくまで一本の木である。ところが、これは「子どものころ…」と、それこそ近い人に語りながら庭に植え、しばらくの間、枯れはしないだろうかと気をもんで見守っていたものだから、私をよく知る人はこの木には親しみを抱いてくれている。場合によっては、どこかで同じモクレンの花を見かけたら、自分のことを思い出すなどして、心のつながりを感じてくれるだろう。つまり、ものごとに「物語」があることは、たがいに情緒的な関係性を生じさせてくれるのである。

人はどうも「物語」なしには生きていけないようで、自身の生き方に強い影響を与えた体験なり、出会いなりをしたとき、それを誰かに語らずにいられないようになっていく。そうした語り、その体験に思いをこめさせ、ものごとと自身をつなぎ、他者ともつなげていく。

現に、子どもたちは、家族に「聞いて、聞いて。」と自分の「物語」を語る。大人も「物語」が好きである。それは気の合う仲間との愚痴のこぼし合いや居酒屋談義、ちょっとした立ち話についても言えることだ。そうした積み重ねをしていくことで、そこに不思議と自分が孤独ではなく他者とつながっていると確認させる力学がはたらくのである。

学校では、この時期からアサガオの種を植えたり、夏野菜の苗や秋花壇の苗を植えたりしていく。世話をしながら、心を通わせ、語り合っていくのである。私が期待しているのは、そうした場で、友だち同士、そしてそれぞれの教室の中に「物語」が生まれていくことだ。それぞれの心の動きをことばにし、つながりあっていける、そんなすてきな「物語」を紡いでほしい。

校長 大林 道範

お知らせとお願い▶今、学校では、スクールガードリーダーのご協力をお願いしています。

別途、地域に回覧させていただいている通知によりご応募下さい。